

枠の設定に着目した 親子関係尺度作成の試み

北村 美緒

[キーワード：①親子関係 ②情緒的受容
③枠の設定 ④枠内での尊重]

1. 問題と目的

本研究の目的は、両親による枠の設定に着目して親子関係のあり方をとらえ、新たな視点からの親子関係尺度の作成を試みることである。

親子関係をとらえる際、それは多様な次元でとらえることができよう。例えば品川・品川（1958）の田研式親子関係診断テストでは、「消極的拒否型」、「積極的拒否型」、「厳格型」、「期待型」、「干渉型」、「不安型」、「溺愛型」、「盲従型」、「矛盾型」、「不一致型」の10の次元を示している。このように親子関係を多角的・全般的にとらえようとする尺度がある一方で、辻岡・山本（1976）の親子関係診断尺度 EICA のように、「情緒的支持」、「同一化」、「統制」、「自律性」の4つの次元でとらえた尺度、また落合・佐藤（1996）による親子関係尺度では心理的離乳への段階に着目して「親が子を抱え込む関係」、「親が子を危険から守る関係」、「子が困った時には親が支援する関係」、「親が子と手を切る関係」、「子が親から信頼・承認されている関係」、「親が子を頼りにする関係」の6つの次元を見出した尺度のように、親子関係のある側面に焦点を当てた尺度も存在する。つまり、多様な親子関係をとらえるうえで、親子

関係を測定する尺度がさまざまな理論や実践の中から一つずつ編み出されてきたといえよう。

また、親子関係とは、親と子どもの相互の関係であり、互いに影響しあい変化していくものである。そしてその相互の影響は、お互いの態度を認知することで生じる。つまり親の実際の態度ではなく、親の態度を子どもがどう認知したかによって子どもの態度が決まり、さらに子どもの態度を親が認知して相互の関係が築かれていくのである。そのため、現実に関がどのような態度を示したかということではなく、子どもがその親の態度をどのように認知しているか、ということが重要であると考えられる。そこで本研究では、実際の親の養育態度ではなく、子どもの認知する親の養育態度を扱い、親子関係について検討する。

親子関係に関する研究は今日に至るまで多くの研究がなされてきており、親による情緒的受容や支持、子どもを尊重する態度が子どもの自尊感情を高めたり、社会適応をよくするといったことが示され、親子関係が子どもの発達や人格形成に大きく影響するということが明らかにされてきている。例えば、石川（1981）の研究では、女子高校生とその両親を対象として親の養育態度と子どもの自尊感情の関係を検討した。その結果、子どもに対する情緒的支持と子どもの自律性を尊重する親の養育態度が、子どもが高い自尊心を持つための基本的要因であるということが示された。また、Mussen, Conger & Kagan（1956、三宅訳、1968）によると、子どもを受容する親の態度は子どもの効果的な社会化に必要な条件であり、子どもに自律を許す養育態度は自信に満ちた自己像の発達にとって重要であることが示されている。そして、あまりに愛情が乏しい、または制限や統制が多いと、子どもに不安、葛藤、不適応行動が生まれるということも指摘した。しかし、その親による情緒的受容や尊重といった態度に加えて、それらを有効に働かせるために重要な鍵を握るものが、親による枠の設定であると考えられる。

枠の設定については、いくつかの研究がその重要性に着目している。

ここで述べる枠というものは、親が子どもに示すルールや規範、約束を意味している。この親子関係における枠の設定に着目した研究として、Coopersmith (1967) は、10～12歳の男子児童とその母親を対象に、親には親の養育態度に関する質問紙と面接を、子どもには質問紙と TAT をそれぞれ用いて親の養育態度と子どもの自尊感情の関連性を検討し、その結果、親の養育態度と子どもの自尊感情の高さに強い関連があることを示した。そして自尊心を形成する3つの条件として、“両親による全面的な受容・情緒的支持”と“明確な枠の設定”、そして“その枠内での尊重と許容”という親の養育態度をあげた。また Baumrind (1971) は幼児とその親を対象とした研究において、子どもの行動観察と質問紙による親の養育態度の調査によって、高いコントロールとあたたかく受容的で子どもの自主性を尊重する親の態度の両方を併せもつ親の養育態度が、子どもの自律性や社会的有能さの発達に効果的であると主張した。Rutter (1984) は同様に、幼いころに様々な社会的生物学的ストレスを経験したにもかかわらず、安定した健康なパーソナリティを発達させる要因として、家庭の内部や外部に情緒的支持を与えてくれるあたたかい人間関係を持っていたこと、わかりやすい規律と効果的なコントロールの要素を持った生活環境であったこと、をあげている。このように欧米では、親子関係における枠の設定に着目した研究がなされ、その重要性が示されてきている。親による枠の設定については日本においても言及されてきており、子どもの行動をどれだけ統制し制限するかということが重要であり、親が極端に子どもの自由を制限し支配すると、子どもは依存的になり無気力になる可能性があり、逆に親が子どもの自由をできるだけ認めれば、子どもは自己主張が強く、自主的に行動するようになる（久世, 1971）、ということや、子どもの自律性を育てる親の関わりとはあたたかさと同コントロールの両方を兼ね備えたものである（氏家, 2003）、ということが論じられている。

このように、親による明確な枠の設定の有無と子どもの精神発達の関

わりについて考察されてきたが、研究によってそのエビデンスが十分に示されてきたわけではない。また、親による枠の設定に着目をして親子関係をとらえる尺度も開発されていない。

日本における親子関係を測定する尺度である、辻岡・山本（1976）の親子関係診断尺度 EICA では親子関係を“情緒的支持”、“同一化”、“統制”、“自律性”の4つの尺度でとらえ、さらに前者2尺度を統合したものとして“「受容性」対「拒否性」”、後者2尺度を統合したものとして“「統制性」対「自律性」”を設定している。EICA によると親による「統制性」と「自律性」は対立するものととらえられているが、Coopersmith（1967）によるとこれらは相反するものではなく、必要最低限の統制があり、その中で自律性を認める、という親子関係を重視している。つまり、統制が強すぎても、逆に自由を許しすぎても良くなく、両者のバランスが重要であるということの意味すると考えられる。

そのため本研究では、Coopersmith（1967）の掲げる親子関係の3つの柱「両親による全面的な受容・情緒的支持」、「明確な枠の設定」、「その枠内での尊重と許容」を仮定し、親による枠の設定に着目した親子関係をとらえられる質問紙を作成することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象者と手続き

2006年7月、大学生を対象に質問紙調査を実施した。性別・学年未記入、無回答を除く有効回答者数は107名（男性31名、女性76名）であった。

(2) 質問紙の構成

質問紙は、調査対象者の属性を調査するための「①フェイスシート」、枠の設定に着目した、認知された親子関係を測定するための「②親子関

係認知尺度」で構成した。

①フェイスシート

調査対象者の属性として、性別と学年を尋ねた。

②親子関係認知尺度

Coopersmith (1967) による3つの親の養育態度に基づいて、(a) 完全な、または完全に近い両親の受容、(b) 明確に範囲を定められ、かつ強制された制約、(c) その限定された範囲の中で行われる子どもの行動に対する尊重と許容、を測定する計20項目を作成した。作成の際に、辻岡・山本 (1976) の親子関係診断尺度 EICA、Parker, Tupling & Brown (1979) が作成した Parental Bonding Instrument (PBI)、落合・佐藤 (1996) で用いられた親子関係尺度を参考にした。父子関係・母子関係それぞれに対して同一項目を用いて測定し、調査協力者には現在の親子関係について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。また、各項目の評定値を項目得点とした。

3. 結果と考察

(1) 親子関係認知尺度の検討

まず、母子関係、父子関係のデータを合わせ、親子関係認知尺度20項目の平均値、標準偏差を算出した（表1）。

平均±1 SDを基準に天井効果、フロア効果を検討したところ、1項目（「見捨てられているように思う」）でフロア効果が見られたため、その項目を除外して19項目に対して主因子法による因子分析を行った。得られた固有値は8.15、2.64、1.39、0.97、0.86、……と推移し、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで3因子を仮定して再度因子分析（主因子法、Promax 回転）を行った。19項目のうち1項目（「私をいつまで

表1 親子関係認知尺度の各項目の平均値と標準偏差

項目内容	平均値	標準偏差	平均+SD	平均-SD
私の話にじっくりと耳を傾けてくれる	3.61	1.184	4.80	2.43
私の気持ちを支えてくれる	3.62	1.160	4.78	2.46
母親（父親）と決めた最低限のルールがある	3.14	1.219	4.36	1.93
自分自身の責任を持たせてくれる	3.92	.915	4.83	3.00
私の心配事を理解しようとしてくれる	3.47	1.112	4.58	2.36
したい事はどんなことでもさせてくれる	3.49	1.065	4.56	2.43
私をいつまでも子ども扱いする	3.02	1.117	4.14	1.90
私を愛してくれているように感じる	4.04	.963	5.00	3.07
決められた事柄を守らないと厳しい	3.53	1.185	4.71	2.34
私の意見を聞いてくれる	3.67	1.064	4.74	2.61
私の考えを尊重し、自分の考えを押しつける事はない	3.22	1.152	4.37	2.07
私の気持ちになって向き合ってくれる	3.16	1.073	4.24	2.09
「していいこと」と「してはいけないこと」を明確に伝えてくれる	3.47	1.178	4.65	2.29
見捨てられているように思う	1.86	.965	2.82	.89
決められた範囲内で自由にさせてくれる	4.08	.810	4.89	3.27
あまり干渉はしないが、いつも私のことを気にかけている	3.65	1.071	4.73	2.58
私が自分の考えで行動していても認めてくれる	3.76	.947	4.71	2.82
決められた約束を破ることに対して、厳しい態度で接する	3.61	1.111	4.72	2.50
私を一人の人間として認めている	3.96	.833	4.80	3.13
適切な距離をとりながら、対等に付き合っていると思う	3.71	1.040	4.75	2.67

も子ども扱いする」)で低い共通性 .14 (.25基準) が示されたため、因子的妥当性を確保するためにその1項目を除外し、残りの18項目について3回目の因子分析(主因子法、Promax 回転)を行った。その結果、18項目から3因子構造が得られ、累積寄与率は60.90%であり、因子負荷量も全て .40以上を示した。Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表2に示す。

第I因子は7項目で構成されており、「私の気持ちを支えてくれる」、「私を愛してくれているように感じる」、「私の意見を聞いてくれる」など、親が子どもを理解し、話や意見をじっくり聞き、ありのままを受け入れ、情緒的に支持している関係を示す項目からなっているため、「情緒的受容」と命名した。

表2 親子関係認知尺度の因子分析結果（Promax 回転，N = 214）

項目	I	II	III	共通性
第I因子 情緒的受容 ($\alpha = .90$)				
私の心配事を理解しようとしてくれる	.87	-.07	.01	.69
私の気持ちを支えてくれる	.84	-.08	.14	.76
私の気持ちになって向き合ってくれる	.90	-.02	-.10	.70
私の話にじっくりと耳を傾けてくれる	.75	-.02	.15	.67
私を愛してくれているように感じる	.58	.16	.08	.54
私の意見を聞いてくれる	.50	.33	.07	.62
私の考えを尊重し、自分の考えを押しつける事はない	.42	.38	-.30	.43
第II因子 枠内での尊重 ($\alpha = .85$)				
私が自分の考えで行動していても認めてくれる	.00	.83	.00	.69
決められた範囲内で自由にさせてくれる	-.07	.70	-.03	.43
したい事はどんなことでもさせてくれる	-.04	.67	-.21	.40
自分自身の責任を持たせてくれる	-.24	.65	.35	.43
私を一人の人間として認めている	.08	.63	.24	.62
あまり干渉はしないが、いつも私のことを気にかけている	.19	.55	-.15	.43
適切な距離をとりながら、対等に付き合っていると思う	.36	.47	.01	.58
第III因子 枠の設定 ($\alpha = .83$)				
決められた約束を破ることに對して、厳しい態度で接する	.06	-.12	.83	.70
決められた事柄を守らないと厳しい	-.07	.00	.81	.61
母親（父親）と決めた最低限のルールがある	.09	-.06	.67	.50
「『していいこと』と『してはいけないこと』を明確に伝えてくれる	.37	.01	.47	.54
因子間相関	II	II	III	
I	—	.65	.51	
II		—	.25	
III			—	

太字は因子負荷量の絶対値が.40以上

第II因子は7項目で構成されており、「自分自身の責任を持たせてくれる」、「決められた範囲内で自由にさせてくれる」、「私を一人の人間として認めている」など、定められた最低限の枠の中で、親が子どもの自主性を尊重し、一人の人間として認め、責任を持たせてくれる関係を示す項目からなっているため、「枠内での尊重」と命名した。

第III因子は4項目で構成されており、「決められた事柄を守らないと厳しい」、「母親（父親）と決めた最低限のルールがある」、「『していい

こと』と『してはいけないこと』を明確に伝えてくれる」など、親と子どもとの間で最低限の、かつ明確なルールが定められている状態を示す項目からなっているため、「枠の設定」と命名した。

そして各下位尺度について信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出した結果、第 I 因子「情緒的受容」で $\alpha = .90$ 、第 II 因子「枠内での尊重」で $\alpha = .85$ 、第 III 因子「枠の設定」で $\alpha = .83$ となり、どの下位尺度においても高い値が示され、内的整合性が確かめられた。

以上の結果に示されたように、本研究の親子関係認知尺度において仮説通りの 3 因子が抽出され、さらにそれらの因子が Coopersmith (1967) の掲げる“両親による全面的な受容・情緒的支持”、“明確な枠の設定”、“その枠内での尊重と許容”という 3 つの親子関係の次元に一致する結果となった。そして各下位尺度の内的整合性も確かめられ、親子関係を「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」という 3 つの次元で測定できること、そして日本においてこの 3 つの次元を用いた親子関係認知尺度が有用である可能性が見出せた。そこで、親子関係認知尺度の下位尺度の分析を進めていくこととする。

(2) 下位尺度間の相関関係の検討

まず、母子関係・父子関係の各下位尺度の合計得点の平均値と標準偏差を算出した (表 3)。

次に、母子関係・父子関係の各下位尺度得点間の相関を調べるために、Pearson の相関係数を算出した (表 4)。

表 3、表 4 より、まず母子関係を表す下位尺度間の相関を見てみると、「情緒的受容」と「枠の設定」間 ($r = .57, p < .001$)、「情緒的受容」と「枠内での尊重」間 ($r = .62, p < .001$)、「枠の設定」と「枠内での尊重」間 ($r = .29, p < .01$) の全ての尺度間で有意な正の相関がみられた。父子関係についても同様に、「情緒的受容」と「枠の設定」間 ($r = .44, p < .001$)、「情緒的受容」と「枠内での尊重」間 ($r = .75, p < .001$)、「枠

表 3 各下位尺度の平均値と標準偏差

		平均値 (標準偏差)
母	情緒的受容	26.06 (5.70)
	枠の設定	14.23 (3.39)
	枠内での尊重	26.63 (4.90)
父	情緒的受容	23.53 (6.31)
	枠の設定	13.28 (4.16)
	枠内での尊重	26.51 (4.82)

表 4 下位尺度間の相関係数

	母			父		
	情緒的受容	枠の設定	枠内での尊重	情緒的受容	枠の設定	枠内での尊重
母 情緒的受容	—	.57***	.62***	.36***	.38***	.39***
母 枠の設定		—	.29**	.22*	.46***	.16
母 枠内での尊重			—	.28**	.28**	.47***
父 情緒的受容				—	.44***	.75***
父 枠の設定					—	.27**
父 枠内での尊重						—

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

の設定」と「枠内での尊重」間 ($r = .27, p < .01$) の3つの全ての下位尺度間で有意な正の相関がみられた。辻岡・山本 (1976) のEICAによると親による「統制性」と「自律性」は対立するものととらえられていると冒頭でも述べたが、本研究における親子関係認知尺度の下位尺度「枠の設定」と「枠内での尊重」の間に有意な正の相関がみられたことより、この2つの次元は対立するものではなく、Coopersmith (1967) も示すように親による必要最低限の枠の設定があり、その中で自律性を認める、という関係が認められるだろう。さらに、「枠の設定」は「情緒的受容」とも有意な正の相関を示しており、親による情緒的受容や枠内での尊重の高さに関連する重要な親の養育態度ともいえよう。

母子関係における下位尺度と父子関係における下位尺度間の相関についても一部を除いては有意な正の相関がみられ、上記と同様の結果を示していると言えるだろう。相関がみられなかった項目は母親による「枠

の設定」と父親による「枠内での尊重」間 ($r=.16$, n.s.) であり、父親による「情緒的受容」と母親による「枠の設定」間 ($r=.22$, $p<.05$) では有意傾向であった。

(3) 親子関係認知尺度の性差の検討

親子関係認知尺度における下位尺度得点の男女差を検討するために、各下位尺度得点を従属変数、性別（男性、女性）を独立変数として、対応のない t 検定を行った（表5）。

表5より、どの下位尺度得点においても男女に有意な差は見られなかった。平均値をみても各下位尺度ごとの男女の得点に大きな差はなく、被験者の性別によらずに母子関係、父子関係を安定して測定できる尺度であると考えられるだろう。

(4) 母子関係、父子関係による下位尺度の差の検討

親子関係認知尺度における下位尺度得点が母子関係と父子関係で異なるかどうかを検討するために、各下位尺度得点を従属変数、対母・対父を独立変数として、対応のある t 検定を行った（表6）。

表6より、下位尺度「情緒的受容」($t(106)=3.84$, $p<.001$) と「枠の設定」($t(106)=2.47$, $p<.05$) において有意な差がみられた。このことは、個人内で母親からと父親からの「情緒的受容」と「枠の設定」の程度が異なると認知していることを示している。つまり母子関係と父子関

表5 性別別にみた各下位尺度得点の平均値(標準偏差)と t 値

	男性 (N=31)	女性 (N=76)	t 値
	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	
情緒的受容	25.87 (5.70)	26.13 (5.74)	-.21
母 枠の設定	14.58 (3.12)	14.09 (3.50)	.68
枠内での尊重	26.55 (4.06)	26.66 (5.23)	-.10
情緒的受容	24.16 (6.21)	23.28 (6.37)	.66
父 枠の設定	13.94 (4.54)	13.01 (3.99)	1.04
枠内での尊重	26.26 (4.00)	26.62 (5.14)	-.35

表6 対母・対父別にみた各下位尺度得点の平均値(標準偏差)とt値

	対母 (N=107)	対父 (N=107)	t 値
	平均値(標準偏差)	平均値(標準偏差)	
情緒的受容	26.06 (5.70)	23.53 (6.31)	3.84***
枠の設定	14.23 (3.39)	13.28 (4.16)	2.47*
枠内での尊重	26.63 (4.90)	26.51 (4.82)	.23

*** $p < .001$ 、* $p < .05$

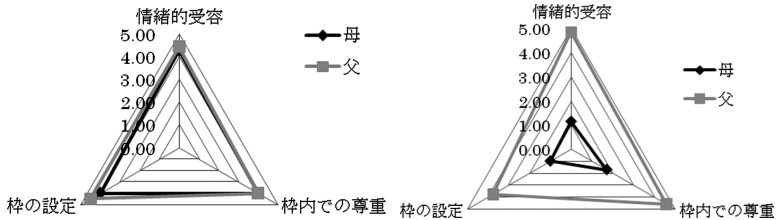


図1 親子関係図 (例1)

図2 親子関係図 (例2)

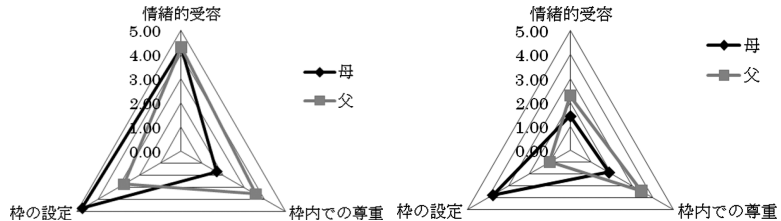


図3 親子関係図 (例3)

図4 親子関係図 (例4)

係が異なるということであり、平均値を見てみるとどちらも父親より母親の方が高い得点を示しており、父親よりも母親からより情緒的に受容され、より明確な枠の設定が示されていると感じていると言えるだろう。また、「枠内での尊重」($t(106) = .23, n.s.$)においては有意な差はみられなかった。

ここに示されたように、個人における母子関係、父子関係を「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」の3つの軸でそれぞれとらえることができ、その違いを検討できるという点で有用な尺度と言えるだろう。得られたデータをもとに、その母子関係、父子関係の違いを図示し

たものをここにいくつかあげる（図1～4）。

図1の親子関係図は、両親からの「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」がどれも十分に高く、両親に十分に受容され、最低限の枠があり、その枠の中で尊重されていることがうかがえ、母子関係と父子関係に差がなく一貫性がみられる。

図2の親子関係図は、父親の養育態度は図1と同様に3つの下位尺度全てで高いが、母親の養育態度を見てみると父親の養育態度とは大きく異なり、全ての下位尺度で低い値を示している。このことから、例2では父親と母親の態度の差を認知しており、父親からは十分に受容され、最低限の枠があり、その枠の中で尊重されている一方で、母親からは受容されず、「枠の設定」の低さから放任的、無関心もしくはしつけが甘い様子が見え、さらに「枠内での尊重」の低さから責任を持たせたり自主性を尊重せずに自由を奪ったり支配的である様子が見え、一貫性のない、アンビバレントな母子関係であることが予想できる。

図3の親子関係図は、母親の養育態度は「情緒的受容」と「枠の設定」で非常に高く、愛情豊かでよく子どもに関わり、約束事やルールが明確であることがうかがえる。しかし、「枠内での尊重」では低い値を示し、枠を設定することに対してその中での自主性の尊重がなされていない、つまり干渉や過保護といった母子関係が見え、一方で父親の養育態度は、3つ全ての下位尺度で概ね高い値を示しており、バランスがとれていると言えるだろう。

図4の親子関係図は、母親と父親の養育態度が大きく異なることがうかがえる。「情緒的受容」については母親からも父親からもそれほど高くない。その上で母親については「枠の設定」が高く明確な枠の提示があるが、「枠内での尊重」が低いことから支配的で、母親による「枠の設定」も支配や統制のための母親本意の枠となっているかもしれない。一方で父親については、「枠の設定」が低くかつ「枠内での尊重」が高いために放任的であったり自由を尊重している可能性が推測できる。

以上に示したように、個人の親子関係のプロフィールを図示することで視覚的にも親子関係をとらえることができ、また母子関係、父子関係の差や各下位尺度の差に着目しながら多角的に考察することができるだろう。そしてパターンによっては各下位尺度が示す「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」をそのまま当てはめるのではなく、解釈しながら包括的にとらえていく必要があると考えられる。

4. 総合考察

本研究は、親による枠の設定に着目した親子関係をとらえられる質問紙を作成することを目的とし、Coopersmith (1967) の掲げる“両親による全面的な受容・情緒的支持”、“明確な枠の設定”、“その枠内での尊重と許容”の3つの親子関係の次元を仮定して調査を行った。その結果、Coopersmith (1967) と一致する3つの親子関係の下位尺度「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」が因子分析によって見出され、仮説を支持する結果となった。

次に母子関係・父子関係の各下位尺度間の相関を検討し、母子関係、父子関係どちらにおいても下位尺度間で有意な正の相関がみられた。この結果により、従来、相対するものだと考えられていた「統制」と「自律」が、共に変動する可能性があるということが明らかになった。本研究における「枠」とは、していいこととしてはいけないことの明確な枠づけや、親との間で決める最低限のルールを表しており、それらのルールや枠を破ることに對して厳しい態度で接する、ということを示す尺度が「枠の設定」である。つまり、EICA における「統制」で示される、強制や指図、罰の厳格さといったネガティブな統制の意味とは少し異なり、守るべき限界を設定するというポジティブな意味を示しているといえるだろう。そのため、「枠の設定」の得点が高いほど枠づけがなされていることを示し、その枠の中で自主性を尊重されることこそ、子ども

の自尊心や自立心を育む有効な手段となるのである。E. H. Erikson の人格発達論では、自律性対恥、疑惑を幼児期初期、自主性対罪悪感を遊戯期の課題として掲げている。この幼児期に、子どもの自己の発達には大きな変化がみられ、行動主体としての自立要求は強くなり、子どもは何でも自分でやってみようとするようになる、と岩田 (2007) は論じている。そして、この子どもの自立要求や主体性を大切にすることによって自尊感情が生まれ、親が子どもの要求を無視したり力で抑え込んで従わせたり、逆に子どものいいなりになってしまったりすると子ども自らが主体性、自律性を持つことを阻んでしまう。そのため、守るべき行動の規範や善悪をしっかりしつける一方で、子どもからの自発性や自主性が委縮しないような配慮、自発性を励まし見守る関わりが大切になってくる、とも述べている。さらに、伊藤 (2006) は子どもの自立心を育む親の関わりについて、安全基地や見守りがまず子どもが自立に向かう土台となり、行き過ぎた行動や危険な行動などは禁止しながらも挑戦させたり冒険させることが子どもの自信を育み、自立に向かっていく、と論じている。つまり、行動の規範や統制は必要ではあるが、厳しすぎる規範や過剰な統制、過度の干渉でも、自主性を尊重しすぎた自由や放任でもなく、最低限の適度な枠、規範が必要であり、これが親による「枠の設定」となると考えられる。

母子関係における下位尺度と父子関係における下位尺度間の相関において、一部で有意な相関が得られなかったことについては、母子関係、父子関係による下位尺度の差の検討の結果と合わせて説明ができるだろう。下位尺度「情緒的受容」と「枠の設定」において有意な差がみられ、個人内で父親よりも母親からより情緒的に受容され、守るべき枠の設定がなされていると感じていることが示された。一つの家庭の中で母親と父親の態度が異なるということは考え得ることで、母親と父親がそれぞれ異なる役割を演じているとも考えられるだろう。そこで、個人の親子関係のプロフィールを図示してみたところ、さまざまな母子関係、

父子関係を「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」の3つの軸でとらえることができた。上述してきたように、「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」という3つの親子関係の次元が、子どもの自立性や自尊感情を高め、精神発達を支える必須条件であるとする、これら3つのバランスがよく、かつ下位尺度得点が高くあることが望まれる。親子関係図の例に挙げたように、3つのバランスはとれていても父親と母親でその程度が大きく異なったり、3つのバランスが歪でかつ父親と母親で異なる様相を示していたりと、親子関係は多様である。そのような複雑な親子関係のあり様を簡潔に明確にとらえられるという点でも、この親子関係のプロフィールは有用であろう。以上に述べたように、本研究によって示された結果から、親による「枠の設定」の重要性と、親子関係を「情緒的受容」、「枠の設定」、「枠内での尊重」の3つの次元で測定できる尺度を見出したことは意義深く、今後親子関係に関するさまざまな研究に貢献できることを期待する。

今後の課題としては、今回作成を試みた親子関係認知尺度の信頼性や妥当性をさらに検討していく必要があると考える。今回は大学生107名を対象としたため、再度大学生を対象に調査を行って結果の再現性を検討することに加えて、中学生や高校生を対象に同様の調査を行って尺度の汎用性を検討することも求められるだろう。また、妥当性を検討するために、別の構成概念を測定する尺度との関連を検討していく必要もあるだろう。さらに、枠の設定に着目した親子関係認知尺度がどのような概念と関連しているのかを調査し、関連性や影響関係を検討することによって、どのような親子関係が子どもの精神発達のどのような側面に関連するかを知ることができるだろう。

引用文献

- Baumrind, D. (1971). Current Patterns of Parental Authority. *Developmental Psychology Monograph*, 4, 1-103.

- Coopersmith, S. (1967). *The Antecedents of Self-Esteem*. San Francisco: W. H. Freeman and Company.
- Mussen, P. H., Conger, J. J. & Kagan, J. (1956). *Child development and personality*. New York: Harper & Row, Inc. (マッセン, P. H. (三宅和夫訳) (1968). 発達心理学 I 誠信書房)
- 石川嘉津子 (1981). Self-esteem と両親像 日本心理学会第45回大会発表論文集, 573.
- 伊藤亜矢子 (2006). 自立心を育む親・教師のかかわり 児童心理, 60 (8), 17-22.
- 岩田純一 (2007). 自尊感情はどう育つか—乳幼児期から思春期 児童心理, 61 (10), 18-23.
- 氏家達夫 (2003). 子どもの自律性を育てるしつけ—子どもの発達と個性に応じたしつけとは 児童心理, 57 (18), 16-21.
- 大西誠一郎 (編) (1971). 親子関係の心理 金子書房.
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979). A Parental Bonding Instrument. *British Journal of Medical Psychology*, 52, 1-10. Printed in Great Britain.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22.
- 久世妙子 (1971). 親子関係の発達心理 大西誠一郎 (編) 親子関係の心理 金子書房 Pp. 21-86.
- 品川不二郎・品川孝子 (1958). 田研式親子関係診断テストの手引 日本文化科学社.
- 辻岡美延・山本吉廣 (1976). 親子関係診断尺度 EICA 実施手引 日本心理テスト研究所.
- マイケル・ラター (北見芳雄・佐藤紀子・辻祥子訳) (1984). 続母親剥奪理論の功罪 誠信書房 Pp. 128-145.

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた調査協力者の皆さま、そして本論文の執筆にあたってご指導いただきました吉川眞理准教授 (学習院大学) に心より御礼申し上げます。

Development of a Scale Measuring Parent-Child Relationships
Focused on the Limit Setting by the Parents

KITAMURA, Mio

The purpose of this study was to develop a new parent-child relationships scale focused on the limit setting by the parents. Based on previous studies, three dimensions of parent-child relationships were hypothesized: emotional acceptance by the parents, clearly defined limits, and respect for individual action within the defined limits. The questionnaire measuring parent-child relationships was administered to 107 university students. The major findings were as follows: 1) Through conducting factor analysis with promax rotation, an 18-item Parent-child Relationships Scale with three subscales assessing Emotional Acceptance, Limit Setting, and Respect within the Limits was developed and validated. These subscales were consistent with previous studies, and all subscales demonstrated very high internal consistency reliability. 2) “Limit Setting” subscale was significantly correlated with “Emotional Acceptance” subscale and “Respect within the Limits” subscale in both mother-child relationships and father-child relationships. 3) It showed no significant gender differences between all subscales. 4) The examination of intrapersonal differences between mother-child relationships and father-child relationships, it was found that “Emotional Acceptance” subscale and “Limit Setting” subscale of mother-child relationships were higher than those of father-child relationships.

These findings insisted the importance of limit setting by the parents, and a reliable parent-child relationships scale focused on the limit setting by the parents was developed. Furthermore, validation of this parent-child relationships scale is required.

（人文科学研究科心理学専攻 博士後期課程 3年）